

福島県 中学校長会 広報

- ・会長挨拶「着実に前進する中学校長会」... 1
- ・学校教育の今日的課題「校長の役割」..... 2
- ・平成25年度県中学校長会の歩みと成果 ... 3
- ・専門部会活動の概要(行財政部会・研究部会・
進路指導部会・生徒指導部会・広報部会)
..... 4~6
- ・小・中学校合同理事会報告、中学校理事会報告 ... 6~7
- ・平成26年度県中学校長会主要行事予定 ... 7
- ・支会情報と特色ある経営(安達・田村・両沼・相馬) ... 8~11
- ・随想「故郷に戻れない中で」..... 12



平成25年度を振り返って ～着実に前進する中学校長会～

福島県中学校長会長 君島 勇吉
(福島市立福島第四中学校)

震災・原発事故から「3年」が経過しました。この「3年」とは、これまでとは違った重さと長さであると感じ取っています。

避難を余儀なくされている地域の中学生は、区域外就学で「3年」が過ぎてしまいました。避難先の学校が、母校となりました。また、仮設校舎(または仮の校舎)に入学し、卒業する生徒も多くいます。そのような生徒達にとっては、とても辛いことであると推察します。保護者や教師にとりましても、心痛む現実がそこにはあります。本県の学校教育は、本当に厳しい問題と向き合っています。

学校は、子どもの教育の場であると同時に、地域コミュニティの拠り所としての存在意義があることを、今般の震災・原発事故は、私たちに再認識させています。それだけに、学校は、地域再生のシンボルであり、子どもが元気であることは、復興のエネルギーになります。学校教育の平常な運営を取り戻すことが、地域復興に欠かせません。

学校経営・運営の責任者であり、教職員のリーダーである校長こそが、復興の牽引役として頑張らなければならないと強く思います。

そのような中での今年度の福島県中学校長会の一年を振り返りますと、次のように総括できます。

1 全日中、東北地区中、教育関係機関等との連携について

全日中会長、他2名の方が本県を訪問されました。被災後の状況について懇談をし、継続的な支援についてご理解いただきました。今年度末に多大なる義援金をいただきましたので有効に活用させていただきます。

東北地区中宮城大会では、次年度開催県としてのご案内と福島県の現状について紹介することができました。特に、福島大会では「ふくしまからの報告」の時間を特設することに賛同していただきました。

東京都府中市中学校長会やベルマーク財団の役員の方々の福島県訪問がありました。仮設校舎数校と飯館村を視察していただき、継続

的な支援へのご協力をいただくことになりました。

2 各専門部会の活動について

本年度は、ようやく震災前の活動に戻ることができました。これまで懸案であった様々なことが、大きく動き出す一年となりました。各専門部会の部会長を始めとします多くの皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。

主な成果は、次のようになります。

行財政部会では、「免許外担当教員の解消」について重点的に取り組んだ結果、県教委が大きく動き出すことになりました。本校長会としましても、県教委・地教委との連携を強化し、「免外」の減少に取り組む必要があります。

研究部会では、研究集録が2年ぶりに発刊できました。今後は、双葉支会の校長会の研究が、支会の課題を踏まえた研究推進となりますよう支援して参りたいと考えます。また、「ふくしまを生きる」第2集の編集では、研究部幹事の皆様や特別委員会の皆様、そして執筆いただいた方々のご尽力に感謝申し上げます。

進路指導部会では、調査書記述内容の県内統一がようやく叶いました。ご尽力いただきました多くの皆様方に心より御礼申し上げます。また、県立 期入試の合格発表がメール送信になるという大きな一歩を踏み出すことができました。高等学校長協会、高校教育課等、ご尽力を賜りました方々にも感謝申し上げます。

生徒指導部会では、SC、SSWの継続的な調査が、行財政部会の調査を補完し、要望活動に大きな弾みを持たせることができました。

広報部会では、本格的に始動しましたホームページの運用にご尽力いただきました。今後の更なる活用と充実が期待されています。

会員皆様のご尽力により、着実な一歩を踏み出すことができましたことを心より御礼申し上げますとともに、本年3月末をもちましてご退職されます校長先生方のこれまでのご功績と長年にわたるご指導に対しまして心より感謝申し上げます。



学校教育の今日的課題

校長の役割

福島県中学校長会副会長 菊池 芳次
(会津若松市立第一中学校)

「ふくしまの復興は教育から」の合い言葉のもと、様々な課題に応えた一年間でした。「原発・震災対応」「確かな学力の定着」「いじめ・体罰の絶無」「不祥事の防止」「体力の向上」等。各学校においては、各校長先生方のリーダーシップのもと、教職員が一致協力し、多くの成果を上げるとともに、新たな課題を明確にしてきたものと思います。

全日本中学校長会では、平成21年の福島大会において策定した全日中教育ビジョン「学校からの教育改革」を昨年3月一部改訂しました。校長自らが学校が取り組むべき課題を明確にし、学校経営・運営への明確なビジョンを持ち、積極的な教育改革に取り組む事を求めています。学校の自主性、自立性を確立し、一層の教育改革に取り組んでいく事が望まれています。

「校長が変われば学校が変わる」「校長のリーダーシップが学校を変える」とは常に言われ続けてきたことです。学校の成果、変化については地域や保護者も強い関心を持っており、校長として常に意識して学校運営にあたってきています。私自身、間もなく教員生活を終えることとなりましたが、振り返ってみれば、様々なことを体験でき、大変恵まれた教員生活だったと思います。これまで、先輩校長、地区校長会、教職員に支えられ、励まされながらやってきました。感謝することばかりですが、校長としてその職責を十分に果たしてきたか、積極的な学校経営ができたかと問われた場合に、心残りとなるものが多くあります。その観点から、校長として必要とされる力量、リーダーシップ、役割とはどういうものなのか、改めて考えてみました。

「日本教育経営学会」が作成した「校長の専門職基準 [2009年版]」が一つの参考になると思います。その中に、「校長は、教育活動の組織化を図りながら、あらゆる児童生徒のための教育活動の質を改善する」とされ、以下の7項目が挙げられています。

学校の共有ビジョンの形成と具現化

学校の教職員、児童生徒、保護者、地域住民

によって共有・支持されるような学校のビジョンを形成し、その具現化を図る。

教育活動の質を高めるための協力体制と風土づくり

学校にとって適切な教科指導及び生徒指導等を実現するためのカリキュラム開発を提唱・促進し、教職員が協力してそれを実施する体制づくりと風土醸成を行う。

教職員の職能開発を支える協力体制と風土づくり

すべての教職員が協力しながら自らの教育実践を省察し、職能成長を続けることを支援するための体制づくりと風土醸成を行う。

諸資源の効果的な活用

効果的で安全な学習環境を確保するために、学校組織の特徴を踏まえた上で、学校内外の人的・物的・財政的・情動的な資源を効果的・効率的に活用し運用する。

家庭・地域社会との協同・連携

家庭や地域社会の様々な関係者が抱く多様な関心やニーズを理解し、それらに応えながら協同・連携することを推進する。

倫理規範とリーダーシップ

学校の最高責任者として職業倫理の模範を示すと共に、教育の豊かな経験に裏付けられた高い見識を持ってリーダーシップを発揮する。

学校をとりまく社会的・文化的要因の理解

学校教育と社会とが相互に影響し合う存在であることを理解し、広い視野のもとで公教育および学校をとりまく社会的・文化的要因を把握する。

学校運営の最高責任者としての校長の役割は多様なものがあり、ここまででよいというものはありません。新たな課題に対しても、前向きに取り組んでいくことが必要とされます。

福島県中学校長会の今後益々の発展を祈っています。

平成25年度

県中学校長会の歩みと成果

事務局長 菅野 善昌
(福島県立福島第一中学校)

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故からまる3年が経過しようとしています。田村市都路町は福島第一原発の半径20キロ圏に設定された旧警

戒区域の避難指示が初めてこの4月から解除される見通しとなりました。しかし、原子力災害に伴う影響により、今もなお臨時休業中の中学校が3校、避難先での仮設校舎等による学校再開は10校に上ります。これらの学校は、震災前とは全く違った状況に置かれており、教育の復興への道のりは険しいと言わざるを得ません。

このような中、各校長は学校経営の最高責任者としてのリーダーシップを発揮し、関係各機関との連携を図りながら、自校の教育課程の効果的な運用と教育環境の整備など一刻も早い教育活動の正常化に向けて鋭意力を尽くしています。

本県の中学校教育の当面する課題としては、学校再開、心身の健康への対応、放射線教育や防災教育の推進など多岐に渡ります。そのような中において、本校長会の運営については、様々な状況下にある学校の実態を踏まえ、「教育活動の正常化と当面する諸課題の解決」を基本方針とし、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源である」という共通認識のもとに、各専門部会を中心に充実した活動を展開することができました。また、本年度は震災報告書「ふくしまを生きる」第2集の編集・発刊を進め、本県教育が向き合った課題を風化させることなく、確かな歩みとして残すとともに、これからの復興に向けた道しるべとなりました。

各専門部会におきましては、県専門部会長・専門部幹事、各支会専門部会長の皆様を中心とした各会員のご尽力により、大変充実した活動となり、大きな成果を収めることができました。

専門部会の活動概要

(1) 行財政部会

前年度に引き続き「大震災・原発事故の影響に係る調査」を含む当面する重要課題についての調査研究を行い、集計・分析の結果を基にして県人事委員会、県議会各派及び各市町村長と市町村教育長への要望活動を実施しました。

また、小中学校長会合同の県教育庁関係者との懇談会を開催し、学力や体力の向上、心のケアと教育相談体制の充実、復興への取り組みなどの課題について意見交換を行い、教育行政施策の一層の充実を依頼しました。

(2) 研究部会

研究主題「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」を指標とした8小主題について、2年次研究を各支会・各学校の実態に即して推進し、集録として刊行しました。

また、特別委員会を組織し、震災報告書第2集として震災後学校が向き合った課題と対応等についてまとめ、今後の本県中学校教育の進むべき方向性について示唆を与えるものとなりました。

(3) 進路指導部会

進路に関する調査結果を「進路指導の現状と問題点」として各学校へ情報提供しました。また、県入試事務調整会議や県高等学校長協会及び私立高等学校協会に対して、より望ましい選抜方法や事務手続き等について提案しました。その結果、「県立高等学校 期選抜の合格者名簿のメールによる情報提供」や、「調査書記入用統一用語集」の作成など事務手続きの統一・効率化等に向けて大きな前進が見られました。

(4) 生徒指導部会

いじめや不登校等生徒の問題行動の解決に向けてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の活用効果を把握する調査を実施し、分析・考察の結果を各学校に情報提供することによって生徒指導の充実を図りました。

また、「いじめ防止対策推進法」の施行を受け、各校長のリーダーシップのもとに校内体制の再構築を図るなどいじめの未然防止や改善に向けた取り組みを展開しました。

(5) 広報部会

昨年度に立ち上げた中学校長会ホームページの管理・運営とともに、広報誌を年2回発行し、ホームページへの掲載等も通しながら、本会の組織・運営、事業内容、活動状況等について、広く内外に情報を発信しました。

専門部会活動の概要

● 行財政部会 ●

県小中学校長会の活動方針を踏まえ、教育行財政上の課題解決のために、組織的な対策活動に取り組んだ。特別調査については、震災後2年以上経過したものの、未だ復旧・復興に向けて多くの困難を抱えている深刻な状況を的確に把握し対応するため、継続実施した。

1 活動の重点

当面する重要課題の調査研究と課題解決
教育諸条件の整備充実

2 調査研究活動

- (1) 調査 : 教職員配置等に関する調査
- (2) 調査 : 教育予算等に関する調査
- (3) 調査 : 教育施策の実施状況調査
- (4) 特別調査 : 大震災・原発事故の影響に係る調査

以上の調査結果を分析し、課題を明確にして
要望内容の資料とした。

3 要望活動

小中の福井会長、君島会長を中心とする要望団を結成し、9月に要望活動を行った。その際、学力向上、不祥事根絶、震災避難者への対応などが話題となり、福島の実現は子どもたちにかかっていることを共通に認識していると感じた。

(1) 面談 (要望内容説明)

福島県人事委員会
県議会議員政党等

(2) 要望書届

福島県市長会、町村長会
福島県町村議会議長会、市議会議長会
市町村教育委員会及び各教育長協議会の
代表機関等

(3) 主な要望事項

教職員の加配について
免許外教科担任の解消について
SC及びSSWの配置・養成について
人材確保のための処遇改善について 等

4 教育懇談等

関係機関と懇談を行い、現状説明等を行った。

- (1) 福島県公立学校退職校長会 (6月)
- (2) 福島県教育庁関係者 (8月)

(行財政部会長 小山 金也)

● 研究部会 ●

1 各支会、各学校の実情に応じた研究の推進

研究主題『未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育』を指標とした8小主題について、「研究の手引き」を活用しながら、第2年次の研究を推進することができた。

2 研究刊行物の編集

研究主題に基づく調査研究の充実、資料や情報の提供の推進を目的として、2年間の継続研究の成果を収めた「研究集録」を本年3月末に刊行予定である。それに向けて各支会の実情に応じた調査研究が進められ、資料や情報の累積がなされてきた。

3 全日中、東北地区中との密接な連携

全日中研究協議会福井大会に参加し、研究主題にかかわる研究の方向性や他県の研究の動向等の情報収集に当たった。また、分科会に参加し、8小主題における研究発表や研究協議の内容等について、情報交換することができた。

東北地区中宮城大会では、第3分科会(第4小主題「健康・安全教育」)において、石川支会が研究内容とその成果について発表し、校長としての実践をもとにした有意義な研究協議が進められた。

また本年6月には、東北地区中福島大会が、福島市で開催予定であり、実行委員会と連携を図りながら、その準備を進めてきた。

4 報告書「ふくしまを生きる」第2集の編集

研究部会を母体とした特別委員会を設置し、県内全支会の協力を得ながら、報告書「ふくしまを生きる」第2集の編集を進めてきており、本年3月末に刊行の予定である。

今後、第2集「凛と生きる」を全国に配布するとともに、その内容については、6月に開催される東北地区中福島大会における『ふくしまからの報告』の中で、震災後2年を経過した福島の中学校現場の現状と課題、今後の進むべき方向性について報告するなどして、県内はもとより、「福島は今」、「震災体験が切り拓いていく教育」を広く東北や全国に発信していきたい。

(研究部会長 佐藤 和彦)

● 進路指導部会 ●

本部会では、(1)「生きる力」をはぐくむ進路指導の積極的な推進。(2)高等学校入学者選抜方法改善に向けて高等学校との連携強化。(3)適正な進路指導推進充実のための諸調査の実施と資料提供の3つの方針を立て活動を推進してきた。

特に、本年度は県立高等学校長協会(高校入試検討委員会)、私立高等学校協会との連携を深め「調査書の記載について」及び「調査書記入用【その他の活動】統一用語集」(最終版)を作成し、県中学校長会ホームページへの掲載、県立・私立高等学校への配付等を通して、調査書の記載内容の統一について共通理解と周知徹底を図った。

主な活動の概要は、以下のとおりである。

1 「生きる力」を育む進路指導の積極的な推進

各支会においては、進路指導に関する情報交換や情報提供を積極的に行うとともに、部会長会においても、情報交換・協議を通して進路指導体制や指導内容の改善・充実の方向性を探った。

2 高等学校入学者選抜方法改善への対応と連携

進路に関する調査の集計結果をもとに、県高校教育課と平成26年度県立高校入試の改善事項や中学校長会の取り組み等について懇談を行った。県立高等学校入学者選抜事務調整会議においても、望ましい選抜方法や事務手続きについて、具体的な改善事項について確認した。

特に、本年度は、中学校からかねてより強く要望してきた合格者一覧の交付について、中学校の負担軽減の視点から、電子メールによる交付も実施されるようになった。また、期選抜入試日程についても、中学校長会が要望した通り、月曜日実施となった。

3 「中学生生活と進路」<福島県版>の編集

副読本「中学生生活と進路」の部分改訂にあたり、全国版と県版の内容の整合性を図るとともに、生徒の実態や生徒を取り巻く情報環境の変化に応じた内容になるよう検討を加えた。また、写真やイラスト、図版を吟味するほか、統計等の資料を最新のものにし、前後関連等を十分に考慮するなど、学習活動に役立つ資料に差し替えを行った。

(進路指導部会長 析久保富雄)

● 生徒指導部会 ●

本部会では、規範意識を高める指導の重視、東日本大震災にかかわる生徒指導上の課題への的確な対応、小学校との連携の重視、生徒手帳編集会議の効率化の4つの活動方針を立て、活動を推進してきた。

特に、本年度は震災後の生徒指導上の諸問題に関する調査を行い、各学校の取組に生かすことができるよう資料の提供を行った。

主な活動の概要は、以下のとおりである。

1 高い規範意識と望ましい人間関係を基盤とした学習集団づくり

今年度は被災3年目に当たることから、反社会的な行動が急増するのではないかと懸念され、各学校において心のケアに努めた結果、成果は見られたが、今後においても、心のケアについて一層配慮した対応を行っていく必要がある。

2 震災等にかかわる課題、不登校やいじめ、反社会的問題行動等当面する諸課題への対応

昨年度の調査を基に、新たにスクールソーシャルワーカーの活用状況、不登校、いじめ、生徒指導上の問題等の課題を加え、調査活動を行った。その結果、スクールカウンセラーについては、今後とも勤務日数・勤務時間数の増加を教育委員会へ働きかけること、スクールソーシャルワーカーについては、その理解を深める研修会の開催や活用体制の整備の必要性が明らかになった。

また、携帯電話、インターネット等におけるトラブルが増加し、その対応が急務となっており、情報モラル教育の一層の推進が必要である。

3 小学校等との連携

中学校区内の小学校、地域等との連携が更に進められ、発達段階に即した一貫性のある基本的な生活習慣づくりに効果をあげているところが増えている。また、広域的な補導等において、高等学校と連携を図るなど新たな連携体制が進んだ。

4 生徒手帳の編集、刊行

生徒手帳の編集は、アンケート調査によって各支会から寄せられた意見を基に部分改訂を行い、各学校のニーズに応じた内容に編集し、刊行することができた。

(生徒指導部会長 吉田 務)

● 広報部会 ●

今年度も7月と3月に広報誌「福島県中学校長会広報」を発行し、本会や支会の活動について紹介するとともに、関係団体等の活動概要の報告を行った。今年度よりホームページ上での広報誌の掲載となったが、支障なく進めることができた。

また、ホームページの更新等の維持・管理を行い、支会だよりについては、各支会の組織及び年間計画を掲載した。

【会報の主な編集内容】

1 第150号（7月1日発行）

会長就任あいさつ（君島勇吉会長）
平成25年度県中学校長会総会の概要及び組織
学校教育の今日的課題（根本保男副会長）

「学校経営充実のために…」

県中学校長会の活動と運営
（菅野善昌事務局長）

各専門部会活動の概要（各専門部会長）

全日本中学校長会総会の概要

支会情報と特色ある経営
伊達・郡山・東西しらかわ・北会津

新会員紹介・新会員の声

随想（山寺精吉副会長）

「言語学的操作に気づく時」

2 第151号（3月14日発行）

平成25年度を振り返って（君島勇吉会長）
学校教育の今日的課題

「校長の役割」（菊池芳次副会長）

県中学校長会の歩みと成果
（菅野善昌事務局長）

各専門部会活動の概要（各専門部会長）

小・中学校合同理事会報告、中学校理事会報告
（茅原秀雄庶務）

平成26年度主要行事予定 [県、東北・全日中]
東北地区中福島大会について

支会情報と特色ある経営
安達・田村・両沼・相馬

随想

「故郷に戻れない中で」（吉田隆見副会長）

（広報部会長 ■橋 賢司）

●小・中学校合同理事会報告●

2月中旬の大雪により、平成25年度を総括する小・中合同理事会が中止になりました。緊急措置として、文書での開催となりましたので、事務局会の内容を基に概要を報告いたします。

福井一明小学校長会長より、震災後の学校運営の諸課題解決に向けての、会員各位の尽力に感謝とねぎらいの言葉がありました。また、最近の教育環境の課題から、全国学力学習状況調査結果公表の動きや教育委員会制度の見直しの動向についての話がありました。いずれにせよ、子供たちの未来のために、校長会としても全力で取り組んでいこうという強い決意と願いが会員に託されました。その後、下記の内容について報告・協議がなされました。

【報告】

- 1 平成25年度退職役員感謝状贈呈式について
- 2 教育関係団体との懇談会について
- 3 小学校長会・中学校長会の合意事項について

【協議】

- 1 平成26年度県小・中校長会合同開会式及び理事会、総会の運営について

期日：平成26年4月23日(水)

会場：福島県教育会館

この他に、次年度の校長会行事予定案について事務局提案のとおり了承された。

- 2 平成26年度教職員人事の反省について
各小・中学校長は、3月25日までに各支会行財政部（会）長に提出する。

各支会中学校行財政部会長は、4月17日までに各支会小学校行財政部長に提出し、小・中合議の上、5月7日まで、140部印刷し、県小学校長会事務局に提出する。

- 3 平成26年度行財政部（会）の調査について
26年度も震災後の様々な環境下におかれる県内の現状を鑑み、継続して特別調査を実施する。調査（教育予算等に関する調査）は隔年調査とし、26年度は実施しない。
退職役員感謝状贈呈式は中止となりました。退職役員は、小学校25名、中学校12名です。多大の功績をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。感謝状は郵送させていただきます。

● 中学校理事会報告 ●

本年度を締めくくる第3回中学校理事会は、去る2月19日(水)～20日(木)の両日に予定されていましたが、大雪のため中止になりました。文書での開催となりましたが、事務局会での提案を基に報告させていただきます。

初めに君島勇吉会長より、福島県の復興に向けた取り組み状況や震災にかかる報告書「ふくしまを生きる」第2集の刊行、全日中の動向、義援金等の用途についての話や来年度の東北地区中学校長会福島大会の成功に向けた取り組み状況について話がありました。その後、下記について報告・協議がなされました。

【報告】

- 1 全日中理事会報告
- 2 会務報告・各部会活動報告
- 3 県中学校長会共催、後援承認行事(事業)について

【協議】

- 1 平成25年度会務・事業について
会議の概要 行財政部会 研究部会
進路指導部会 生徒指導部会 広報部会
- 2 平成25年度会計執行状況について
- 3 平成25年度関係団体との連携について
- 4 平成26年度事業計画案について
活動方針 活動目標・内容
行財政部会 研究部会 進路指導部会
生徒指導部会 広報部会
- 5 平成26年度中学校長会行事予定案について
- 6 平成26年度会計予算案について
- 7 第64回東北地区中学校長会研究協議会福島大会について
- 8 平成26年度第1回理事会の運営について
- 9 平成26年度第64回総会の運営について
上記の件について、事務局提案の通り了承されました。

【連絡】

- 1 平成26年度全日中大会への参加割り当てについて
- 2 平成25年度古岡奨学生の内定について
- 3 平成26年度当初の関係書類提出について
- 4 平成26年度の会費納入について

平成26年度中学校長会主要行事予定

[県、東北地区、全日中関係]

月	日	県 関 係	東北地区中・全日中関係
4	10 23	合同事務局会 第64回総会・理事会	
5	15 20 21 28 29	行財政部合同部会長会 合同事務局会 研究部会長会	全日中理事会20 全日中総会(21~22)
6	4 6 10 13 26	合同理事会(4~5) 進路指導部会長会 生徒指導部会長会	東北地区中副会長会 東北地区中副会長会・理事会 東北地区中福島大会(26~27)
7	9 24 25	行財政合同代表部会長会 ・広報152号発行	全日中理事会 全日中役員研修会
8	5 20	合同事務局会 合同理事会	
9		要望活動	
10	8 9 9		臨時副会長会 全日中理事会 第65回全日中北海道 (苫小牧)大会(9~10)
11	11 13 18 19	研究部会長会 進路指導部会長会 合同事務局会 生徒指導合同部会長会	
12	2	合同理事会	
1	20 23 26 28	研究部代表部会長会 進路指導代表部会長会 生徒指導代表部会長会	全日中理事会
2	4 5 6 18 19	行財政合同部会長会 合同事務局会 合同理事会(~19)	東北地区中副会長会・理事会・ 監査会・事務局会(福島市) 全日中事務担当者会(19~20)
3	17	・広報153号発行 会計監査	

● 平成26年度東北地区中学校長会の概要 ●

- 1 大会主題
『未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え
社会において自立的に生きる日本人の育成』
- 2 期 日
平成26年6月26日(木)・27日(金)
第1日目:「開会式」、「ふくしまからの報告」
「文部科学省行政説明」
第2日目:「分科会」、「記念講演」、「閉会式」
- 3 会 場
飯坂温泉観光会館(パルセ飯坂)他
- 4 記念講演
講師:アクアマリンふくしま
館長 安部 義孝 氏
演題:「 検 討 中 」

支会情報と特色ある経営

安達

安達支会の活動



安達支会長 佐藤 英之
(二本松市立二本松第二中学校)

安達支会は、2市1村の11校の会員で構成されています。今年度は5名の新会員を迎え、「安達は一つ」の合言葉の下、連携を重視

した活動を行ってきました。

本支会は「教育に関する研究及び協議を行い、その改善向上を図るとともに、地域教育の発展に寄与すること」を目的に、例年下記のような事業を推進しています。(一部のみ掲載)

学校経営に関する研究及び協議

教育上必要な調査及び研究

会員相互の職能の向上を図るための事業

その他本会の目的達成に必要な事業

震災後は、本会の活動も制限されたこともありましたが、各学校の活動も正常化し、教育活動の一層の充実を図ることを目的に、諸活動に臨みました。その活動の一部は次の通りです。

1 校長会の開催について

これまで年3回程度の校長会を行ってきましたが、震災後のきめ細かい教育活動を行うため、3回ほど校長会を増やし、「学校経営の在り方」「情報交換」「活動の確認」などを行い、支部全体で充実した学校経営を目指してきました。

2 研修会の実施について

「キャリア教育」について研究を進め、各学校の進路指導の充実に努めました。また、教育制度への理解など教職員の資質の向上を目標に、市村教育委員会の支援を受け、教頭、中堅教員、講師に対する実務研修会を実施することができました。

3 その他の活動

中止した懇談会もありましたが、12月には退職校長との懇談会を実施しました。今年度は退職、現職の校長が4つのテーマの分科会に分かれ、意見の交換を行い充実した教育懇談会となりました。会員相互の親睦にもつながり、安達の今後の教育について共通理解を深めました。

《学校紹介》

「学校再生と新たな校風づくり」

本宮市立本宮第二中学校

本校は、東日本大震災により校舎と体育館が大きく損壊するという甚大な被害に遭いました。

しかし、市当局・教育委員会等の迅速な対応により、翌月には近くの公民館の体育館を仕切って授業を再開、7月には校庭に仮設校舎が完成し、昨年7月までそこで学習してきました。

この間、一昨年度は「希望、そして再生」、昨年度は「自信と誇り～学校再生と新たな伝統の創造」を学校経営基本理念に教育活動を推進し、決してよい環境とは言えない中でも生徒や教職員は、元気に一丸となって生活し、部活動や学習において様々な成果を残してくれました。

今年度は、体育館や校舎が完成し、第2学期より「新生本宮二中」がスタートすることから、経営の基本理念を「自信と誇り～学校再生と新たな校風づくり」と決めました。生徒は体育館での行事を経験しておらず、教職員は新体育館や新校舎に対応した行事計画や学習活動等を新たに構築する必要があることから、それまでの計画を大幅に見直し、新たな視点で考え直すことをとおして、不易と流行を踏まえた「新しい校風」について、生徒と教師が一丸となり模索しています。



▲新体育館での文化祭(安達太良太鼓)

また、平成26年度は、創立50周年という大きな節目を迎えます。これからの半世紀を見据えた「震災体験が切り拓いていく教育」を推進すべく、地域と共に歩んで参りたいと思います。

(校長 武藤 成也)

田村

田村支会の活動状況について



田村支会長 根本 保男
(田村市立船引中学校)

田村支会は、三春町の4つの中学校の再編により学校数が昨年度の14校から11校へ減少してのスタートとなりました。一度に3校という学校数の減少により、本会、中教研、中体連、各種団体等の組織づくり、そして、それぞれの組織での運営面等、様々な課題を抱えながらのスタートとなりました。しかし、組織が小さくなったデメリットは確かに生じましたが、それらを補うために、組織が小さくなったことのメリットを生かし、次のような点からネットワークを密にし活動の充実を図ってきました。まず、主な役割を偏りなく全員で分担することで、それぞれが組織運営の中核をなす組織づくりを行いました。また、各学校での問題傾向や改善のための具体的な手立て、取組等についての情報交換と共通理解を充実させるため、研修の場としての教育懇談会を新たに年3回設定しました。学校経営上の課題や悩みを話し合ったり、改善策を話し合ったりする具体的な機会が増えたことで課題や改善策の共有化が図られることとなり、各学校での教育活動の充実に役立っていたと感じています。放射線の状態については、まだ一部心配な声もありますが、田村支会としては、全体的に落ち着いた状況に向かっていると感じています。現在田村市内の旧春山小学校を仮校舎としている都路中学校も、次年度より都路に戻り学校を再開できることとなりました。待ちに待った学校再開です。円滑な再開と充実した教育活動に向け、田村支会としても精一杯支援していく所存です。本年度も学力向上他の課題解決に向け、田村支会各学校ともにそれぞれの学校経営の充実に努力してまいりました。次年度は、小野町の2つの中学校の統合によりさらに1校減少し10校での組織となりますが、次年度も田村の子ども達のために、力を合わせ、知恵を出し合い、一層充実した実践ができるよう努力したいと思います。

《学校紹介》

子どもと教師の夢がともに育つ学校づくり

三春町立三春中学校

平成25年4月6日、三春町立三春中学校が開校しました。桜中、沢石中、要田中、三春中の4校を再編し、町のほぼ中央、三春町貝山の新社舎で、全校生392名の学校生活が始まりました。

これまで4つの中学校が「子どもの夢と教師の夢がともに育つ学校づくり」をスローガンに培ってきた教育実践を総括し、「三春の教育」の収斂としての出発です。

本校は学年型の教科教室の形態をとり、生徒一人一人に確かな学びを保证する教科経営を進め、学力の向上を目指しています。生徒は時間割に合わせ、ホームベースから教科教室に移動して学習します。教科教室ではそれぞれの教科に応じた学習環境作りが進められています。

また、地域と共に学校づくりを進めるコミュニティスクール構想のもと、三春中学校運営協議会を組織し、地域の方々から学校経営に関する意見をいただいて、地域に開かれた学校づくりを進めています。年間3回の会議では、委員の方々より様々な視点からご提案をいただいています。

さらに、生徒の個性・可能性の伸長を図る教育課程・教育活動を推進し、「生徒が主役の学校づくり」を目指しています。生徒の多様性に対応し、生徒の夢や希望に共感し、それらを育成する場の形成を目指して、教育内容や方法の改革を続ける、創造的教育観をさらに機能させていきたいと考えています。



(校長 添田 直彦)

両 沼

1年間を振り返って



両沼支会長 齋藤 芳信
(会津美里町立本郷中学校)

両沼支会は中学校が10校、半数が僻地小規模校であり、東日本大震災や原発事故の影響も少なく各校とも正常な教育活動が行われています。

す。

両沼中学校長会の活動としては、例年どおりの事業計画のもとに活動しましたが、今年度は福島県中学校教育研究協議会が会津地区で開催されたことや、青少年赤十字福島県指導者研修会・学校公開が両沼地区で開催されたこともあり、これらを含めて主なものを報告いたします。

1 退職校長会と現職校長会の教育懇談会の開催

小中学校の退職校長と現職校長の教育懇談会を8月22日(木)開催しました。会津食のルネッサンス代表取締役本田勝之助氏をお迎えし、「子供たちが生き抜くこれからの社会」と題して講演会を開催しました。また、3つの部会(学力向上、生徒指導の充実、不祥事の絶無)に分かれて懇談会を開催しました。

2 県中学校教育研究協議会会津大会の開催

県大会が会津地区で10月9日(木)に開催され、11専門部のうち3つの専門部を両沼支部で受け持ち、音楽科は本郷中学校、英語科は坂下中学校、特別活動は高田中学校で開催しました。どの部会も県内各地より多くの会員の皆様の参加と積極的な発言により大変充実した研究協議会となりました。

3 JRC県指導者研修会・学校公開の開催

青少年赤十字福島県指導者研修会・学校公開が多数の参加のもと10月4日(金)に会津美里町立新鶴小学校と新鶴中学校を会場に開催されました。公開授業では、小学校は全ての学級が公開授業を行い、中学校は生徒会総会を参観していただきました。分科会は小学校、中学校、賛助奉仕団の3つの部会に分かれて開催、活発な意見が交わされました。日本赤十字学園常務理事井上忠男氏をお迎えしての講演会も開催しました。

《学校紹介》

坂下中三原則

会津坂下町立坂下中学校

昨年度、坂下一中と坂下二中が統合し、新しく本校(坂下中学校)が誕生しました。全校生徒500名を超える全会津屈指の生徒数になり、様々な期待を寄せられる中、開校しました。

開校に当たり、最初の始業式で、2・3年生に次の話をしました。

「学校の誕生に当たり、坂中生全体として大切にしていきたいこととお話しします。それは、『坂下中三原則』を心に留め生活するということです。三原則とは、「心のこもった挨拶」「しっかりとした服装」「時と場に合った言葉づかい」ができることです。「あいさつ」「服装」「言葉づかい」の3つを『坂下中三原則』として胸に刻んで生活してください。」

以降、全校集会や校長講話等では、必ずこの三原則についての取り組みやその課題について話題にしました。教職員も機会あるごとに三原則の大切さや実施状況について評価し、指導してきました。その結果、生徒会や学年集会においても、リーダーの生徒たちが三原則を自分たちの活動の指針とするようになりました。

今年度からは、現職教育においても、『坂下中三原則』に準じた「授業に臨む5つの約束」の定着をテーマの一つとして取り組んできました。

「授業に臨む5つの約束」は昨年度末に全職員でしっかり話し合い、決定したものです。

今後も『坂下中三原則』『5つの約束』を基盤に、活気と笑顔のある学校づくりに努めていきたいと思えます。

授業に臨む5つの約束

- 1 2分前着席
- 2 正しい服装
- 3 あいさつと礼
- 4 授業に集中
- 5 正しい言葉づかい

(校長 瓜生 幸男)

相馬

相馬支会の活動



相馬支会長 大原 正義
(相馬市立中村第一中学校)

相馬支会は、新地町・相馬市、南相馬市鹿島区・同原町区、及び南相馬市小高区・飯館村の3方部会を置き、計13校の会員で組織されています。新会員1名、再会員1名を迎え新たな気持ちで活動を推進しています。津波被害の大きかった沿岸部と原発事故により生活区域がそれぞれ指定されている学区を持つ学校があります。震災、原発事故から3年になろうとしている今でも、避難先の仮設校舎で開校している飯館中と小高中の2校があり、復興は進んではいるものの、まだ厳しいものがあります。

しかし、このようなときだからこそ、13校の校長が結束して事に当たることが大切であるという認識で、昨年の実績と反省のもと、活動しています。活動の一部は、以下の通りです。

1 定例校長会の実施

研修会(年2回)、小中学校長協議会(年2回)では、「各専門部の活動計画の確認」「中体連、中教研関係」「研究推進に関すること」「生徒指導・学校経営上の情報交換」「反省と次年度に向けた課題」等について協議を行いました。また、小中学校長協議会では「教育の動向と課題」の講演会、その部会では警察と連携し「情報モラル研修会」を実施しました。

2 相双中・高等学校長連絡協議会の実施

6月10日に郡山市のユラックス熱海で、各校の現状や今後の中高連携のあり方など、離ればなれの状況の中で、できる限りの一体感を持ち、生徒たちのためできることは何かについて協議しました。

3 その他の活動

中学校長会として、退職校長との懇親会を9月に、小中学校長協議会として、11月には永年勤続表彰等受賞祝賀会が開催でき、会員相互の親睦を深める事ができました。

《学校紹介》

まだ遠い復興までの道のり

南相馬市立小高中学校

小高中学校は、原発事故20kmの警戒区域に残された相馬支部唯一の中学校で生徒の避難状況は未だに県外に7割、県内に2割、本校に1割といった状況で平成23年4月22日の南相馬市の学校再開も鹿島中学校の教室をお借りして全校生徒数42名で一学期を迎えました。



震災がなければ各学年4学級、全校生徒350人、吹奏楽とバレーにおいては全国大会出場常連校、もちろん、その他の部活動も県大会・東北大会と活気あふれる学校でありました。しかし、震災後の小高地区は東側が津波被害による家の流失、西側地区の家は残っているものの原発被害のため、未だに空間線量が高く帰還できない状況です。

今回の震災で多くの生徒が避難したままの状態、はや3年になろうとしています。生徒数については、23年11月から仮設校舎に移動したものの避難先の学校での人間関係が上手くいかずに戻ってきたり、3年生になり進路を考えて地元の高校に入学するために戻ってきたりと23年度終了時点での107名を最高に3年経った今でも震災前の約25%と横ばいです。

平成24年度からは文部科学省の緊急事業によって生徒に対して週3日間の体制でカウンセリングを行うことができるようになりました。

未曾有の被害を生んだ東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故は「一瞬に故郷を失い」「目に見えない原発の恐怖」「地域・家族の崩壊」など今回の震災から受けた子ども達への影響はあまりにも大きいです。こんな中であって私たち教師は、せめて学校だけは平常の生活を展開し、子ども達の最も近くにいる大人として寄り添い、復興までの現実と正面から向き合い一つの難局を生徒と共に乗り越えて行きたいです。

(校長 遠藤 弘通)

2011年3月11日午後2時46分、立っていられないほどの大きな揺れが、襲った。雪混じりの強い西風、厚い鉛色の雲に覆われた空、凍えるような寒さの中、子どもたちと校庭で揺れが収まるのを待っていると、「この世の終わりでは…」の思いが脳裏を過ぎった。翌3月12日の早朝、防災無線による「原発事故により、全町民避難せよ。」の繰り返しの放送に耳を疑う。それでも2、3日我慢すれば家に戻れるだろうと安易に考えていた。

あれから光陰矢の如く、3年の月日が流れようとしている。3回の引っ越しで、現在、須賀川の狭いアパートで避難生活をしている。何か満たされない気持ちを払拭しようともがいているが、どうにもすっきりしない心境の今の自分がある。

還暦をまもなく迎える歳での避難生活からなのか、今、郷愁の念に駆られる。しかも幼少の頃の……。ナイフ、マッチを携行し、時間を忘れて一日中、野山をかけずり回ったものである。足下の雑草の一つ一つも懐かしく思い出される。種のついた根元部分を茎にそって少し剥ぎ、茎を回すと可愛らしい音をだす「ペンペン草(ナズナ)」、塩をつけた茎を食したら、顔をしかめるほどの酸味のある「スカンポ(スイバ)」、花茎を編んでの冠や縄跳び用の縄として遊んだ「シロツメグサ(クローバー)」、花穂の茎どうしをひっかけ、引っ張り合いっこをした「がえるっ葉(オオバコ)」、…。大げさに言えば、遊びや体験をとおして自分を成長させてくれた雑草たちである。

今の世の中、仕事を含め多くの面で、スピード・能率・実績を重視する傾向が強いように思う。しかし、よりストレスを抱え、疲労感に悩まされてしまうことも多くなる。こんな時、私自身は、休日の過ごし方にその解消を求めた。すなわち、「家庭菜園」である。農家の次男として生まれ、小さい時から米、野菜作りの手伝いをして育ったこともあり、土いじりに抵抗はなかった。自分のペースで、野菜作りに勤しむことは仕事の世界から離れ、頭の中を無にする充実した一時でもある。野菜のでき具合に一喜一憂しながら、リセッ

トされた心境で、明日への意欲が湧いてくるのである。

もともとは僅か5、6坪ほどの宅地の一角を菜園にし、毎年、数種類の野菜作りにチャレンジしていた。こだわったのは、ただ無農薬ということである。手入れを怠り、虫に食い荒らされたり、病気で枯らしたりしてしまったことは数え切れない。でも、自分で育てた野菜にはどんな姿、形であろうが、愛着が湧くものである。

ある年、こんなことがあった。白菜の苗の植え付け時期が、遅かったことを気かけながら育てていた。案の定、大きくはなったが、丸まらず押し開いた形になっている。冬のある日、その白菜を見ると外側の緑色をした葉が啄まれているのに気づく。どんな小鳥が啄んでいるのか、興味が湧き、それから朝夕、頻りに観察するようになった。数日後の早朝、葉を啄んでいる小鳥に遭遇する。体の大きさ、灰色がかった羽、長い尾羽などの特徴からすると、「ヒヨドリ」であるらしい。その後も観察をしていくと積雪時の目撃が多い。どうやら、えさを取るのに窮しているときの非常食ではないかと想像した。外

側から順に内側の緑色部分の葉だけを啄むので、その白菜の株は白い茎の部分だけの姿で、なんともみずばらしい様になっている。でも、生長点である緑色の中心部分を啄むことは、最後までなかった。そこを啄むことが生長を阻害し、白菜を枯らすことにつながりかねないことをヒヨドリは知っていたことだろうと思いながら…。

このように、縁側で胡座をかきグラスを片手に、野菜作りに思いをはせている時こそ、まさに、至福の一時なのである。

妻との避難生活の中で、故郷・双葉に戻らないと決断した今、残りの人生、「終の住処」をどこにするか、そして家庭菜園の復活はもちろんのこと、生き甲斐を何に求めるかの話題になると、この時ばかりは話が盛り上がる今日この頃である。

随想



双葉支会長
吉田 隆 見
(富岡町立富岡第一中学校長)

故郷に戻れない中で